



——遺言書があるからダイジョーブ！

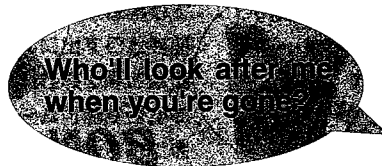
もし私が急死したら、この子はどうなるのだろう……飼っている犬／猫について考えたことがあるのでは？ あなただけではありません。多くの飼い主が、自分が死んだり世話できなくなった後のペットの将来を気にしています。

アークは、万一あなたの身に何かが起きても、愛犬／猫をお世話させていただきます。ただし、ペットの将来を安全で幸せなものにするには、準備が必要です。飼っているペットの面倒をアークに頼みたい旨を明記した遺言書を用意しなければなりません。これは、ご意思について混乱を防ぐために絶対不可欠です。

もしも、あなたが動物を愛するなら、その愛を存続させる妙案があります——それは、遺言を残して、アークに遺贈すること。

最近、アークが受けた相談事に、自分の死後に残される愛犬／猫の行く末を案じる人からの質問と、遺言による財産寄付についての問い合わせが数件ありました。ずいぶん前から、欧米の確立した動物福祉団体では、「遺贈」が組織を支える「頼みの綱」となっています。この種の寄付は、それを受ける動物保護団体の安定性と長期にわたる財政的健全性に大いに貢献し、しかも、寄贈者自身も、遺産が愛の証として将来にわたり動物のケアに使われるという保証を得られるのです。

私どもは、「遺産贈与制度」（仮称）設立を目指し、現在（複数の）弁護士と検討中ですが、その中には、「残されたペットのお世話」も含まれています。この制度に関心をお持ちの方は、アークの岡本までご連絡をお願い致します。（電話番号：072-737-0712）



Do you ever wonder, "What would happen to my dog or cat if I were to die suddenly?" You are not alone. Many owners worry what would happen to their pet (s) should they become incapacitated or die.

ARK is ready and willing to take care of your pet should something happens to you but to ensure a safe and happy future for your pet(s), you need to make preparations. You need to leave instructions in a Will confirming that you would like ARK to look after your pet(s). This is essential to ensure that there will be no confusion about your wishes.

If you love animals there is a great way to make your love last - by leaving a gift to ARK in your Will.

Recently ARK has received several inquiries from people worrying about their pet's future when they pass on and also about donating assets through a will. Bequests or legacies have long been a mainstay for established animal welfare organizations in Europe and North America.

Donations of this type greatly enhance the stability and long term financial health of animal charities who receive them and people are assured that their legacy is a gift of loving care for animals for years to come.

ARK is now in discussions with lawyers to set up a legacy-giving programme that includes the care of pets left behind. Anyone interested in participating in this programme should contact Ms. Okamoto at 0727-37-0712.

の祭典といった感じでしょうか。企業ブースもあって、日本でもおなじみのドッグフードの会社がずらりと並び、新作フードの試供品配布や、販売なども充実していました。

シェルターのPRブース、イギリスケンネルクラブのしつけ教室、犬たちが楽しげに披露するアジリティードッグショー、気品あふれる自慢の犬のドッグショーなどなど、目が回るほどの面白さでした。

その中で、もっとも私が衝撃を受けたのは、中国の犬猫食肉文化をやめさせようとするキャン

ペーン活動をしている団体に出会ったことです。PRビデオをみて、胸の中でざわざわと何か吹き溜まりのようなものが湧いてくる感覚を覚えました。小さなケージに何匹も入れられた犬猫たち。そこへ、鉄のさすまたが近づき、恐怖に怯え、怒り狂う動物の首をつかんで、あらあらしく別のケージに放り投げ、その末路は…表現するにもいいようのない、残酷さが映し出されていました。中国では犬猫を食べる。それは以前から聞いてはいたものの、実際の状況を見るのは初めてで、私にはとてもつらかったです。文化の違いと言ってしまえば、それで終わって

しまうことかもしれませんが、人にとってとても身近に存在する犬猫を食することに、疑問を感じてしまいました。

今回の研修は私にとって大きなものを得るものとなりました。今まで、日々仕事に追われてじっくり考えることができなかった「動物シェルターとか何か」「日本とイギリスの何が違うのか」。私なりに、答えを見つけて帰国しました。もう一度、初心に戻って、今後も日本での動物福祉に少しでも明るい未来が広がるよう、私たちは懸命に活動を続けていきます。